

戦前期における新潟県央地域産業界の大陸進出

観光経営学部 教授 大宮 誠

1. はじめに

日本海航路新潟北鮮線を利用し朝鮮・満洲国を視察してきた関係者の発言で次のような趣旨のものがあつた。「新潟県産業界の大陸進出が極めて低調であり、関西系の商人に市場を握られていることは、新潟県の発展にとって大きな課題である」。また、1936（昭和11）年8月に新潟県の神戸大連駐在員は、長岡市役所における鮮満取引座談会の席上次のように語っている。「満洲ニ於ケル新潟県人ハ7千人位内大連在住者ハ二千人位デアルガ県産品ヲ支那人向ノモノハナイ、先ズ県人ニ依テ其ノ愛用ヲ求メネバナラヌ 地理的關係カ新潟県人ハ関東、関西人ニ比シ渡滿ノ時期ガ手遅レデアツタ關係上ドウシテモ彼等^{いっちゅう}ニ一籌ヲ輸シテ居ル状態デアル」¹。いずれも新潟県人の大陸への進出が遅れているということを指摘している。

本稿を執筆するにあたって、次の先行研究を検討した。

波形昭一『近代アジアの日本人経済団体』（同文館、1997年）では、戦前期のアジア諸国・諸地域に散在した日本人経済団体を対象として分析している。この中で、木村健二は「第2章朝鮮における商業会議所連合会の決議事項」で、会議所の役員・議員の特徴を分析している。また、1911年4月に京城で全国商業会議所連合会定期大会が開催され、出席した会議所について述べている。朝鮮内の10会議所すべてのほか、日本本国は半数以上にのぼる33会議所であった。東京、大阪、神戸、京都、名古屋の他、西日本・日本海側を中心とする地方の会議所が多く参加していることが特徴であるとしている。日本海側では、函館、新潟、長岡、長野、富山、高岡、金沢、福井などであった。人的なつながりや貿易関係が緊密なところの関心の高さを反映していると指摘している。柳沢遊は「第4章「満州」における商業会議所連合会の活動」で、満州各地の商業会議所が、設立以来在満日本人商工業者や同業組合の地域的業種の利害を建議にまとめ、日本政府・満鉄・関東庁に対して請願活動を展開している状況を述べている。塚瀬進は「第5章奉天における日本商人と奉天商業会議所」で、奉天商業会議所は編集した『奉天商工名鑑』から、業種別の店舗数等を抽出して分析している。

塚瀬進『満洲の日本人』（吉川弘文館、2004年）では、満州事変期前における、在満日本人の進出状況を、時代を追いながら述べている。満洲への日本人の流入は、ロシアが満洲経営を始めたことから一変したとしている。1898年の東支鉄道建設工事をきっかけに、建設景気がおこり、建設労働者や労働者の衣食を目当てにした商人がやって来た。その中に日本人もいたという。日本人労働者のほかにも東支鉄道沿線には、「本邦婦女（日本人売春婦）」がやって来て、次いでこれらの婦人に日用品を売る日本人雑貨商が来たという。日本人売春婦は19世紀末にはシベリア各地に流入しており、その一部が満洲北部へ向かったとしている。これらが満洲への日本人流入の嚆矢であり、満

洲事変期前までの拡大の状況を描いている。敗戦時には150万人の日本人が満洲で生活をしてきた。

最近では、平田賢一が「日中戦争前夜の植民地朝鮮で流通していた日本語書籍」『アジア太平洋研究センター年報2017-2018』（大阪経済法科大学，2018年）で、朝鮮で出版や流通を担っていた出版元、取次、小売書店などの実態について述べている。

いずれも、進出企業経営者等の日本国内の住所・本籍等には触れられていないが、本稿を進める上で検討すべき資料などについて大いに示唆を受けた。

本稿では、新潟県産業界の大陸進出は指摘されている通りなのか、あるいは積極的な大陸への進出の跡が見られないのか、新潟県央地域産業界特に三条・燕の金物産業界を中心に検討してみたい。対象とする時期としては、明治時代、大正時代、昭和時代前期（日本敗戦まで）とする。

検討の方法として、市町の記録、新聞記事、当事者の手記・回想録、河田鶴三郎編『新潟県人鮮満名鑑録』（越佐新報社鮮満支局，1926年）などを用い新潟県央地域産業界の大陸進出の軌跡の一端を示したい。

なお、本稿では地名は当時のままで表記した。また、引用文中に民族に関わる不適切な表現が含まれているが、資料としての原文を尊重して原文通りとした。

2 明治時代

はじめに、新潟県の金物産業界を取り巻く状況についてみてみよう。

近世以来、全国的産地として展開してきた金物産業も、外国貿易の進展に伴って環境が大きく変化し、生産品の再編が迫られている。

1874（明治7）年の県内金物生産の首位は釘類（66％）で、次いで鎌・鋸・包丁等の刃物、鍋・釜等の家庭金物及び農具等の順となっている。

しかし外国製の釘（洋釘）の輸入により和釘は急速に減少した。右表に示すように釘類は27％、刃物類は35％と変化している。

釘類を主軸として展開してきた新潟県の金物業は刃物類を中心とする産地へ転換したことを示している。

表1 新潟県の主な金物生産額（明治10年）

| | 品目 | 数量 | 生産額(円) |
|-------|-----|-----------|--------|
| 刃物 | 鎌 | 286,702 丁 | 20,390 |
| | 包丁 | 123,273 | 8,636 |
| | 鋸 | 16,994 枚 | 6,542 |
| | 小刀 | 259,929 丁 | 5,416 |
| | 鑢 | 45,000 | 5,062 |
| | 鉞 | 204,004 | 4,352 |
| | のみ | 29,553 | 2,222 |
| | 鉋 | 8,165 | 2,088 |
| | 鉋 | 12,107 | 2,005 |
| | 計 | | 60,154 |
| 釘鉚 | 釘 | 119,041 貫 | 41,810 |
| | 銅鉚釘 | 6,394 | 4,054 |
| | 計 | | 45,984 |
| その他金物 | 鍬 | 45,628 丁 | 20,956 |
| | 鍋 | 57,527 個 | 17,016 |
| | 釜 | 10,343 | 6,764 |
| | 銅矢立 | 34,819 本 | 4,785 |
| | 銅鍋 | 2,645 個 | 2,211 |
| | 鍵 | 68,807 | 1,162 |
| | 煙管 | 38,285 組 | 929 |
| 計 | | 64,758 | |
| 合計 | | 170,896 | |

注：『新潟県史通史編6』より作成。

2-1 三条の金物業

2-1-1 金物産地形成

三条の多品目の金物産地形成の状況についてみてみよう。県内最大の金物産地三条は、近世においては会津から鋸の製造技術が伝えられた。明治期にはいると会津から直接技術導入を行った与

板・脇野町をはじめその他の地域から刃物技術の伝播があって、多品目の金物産地を形成している。それぞれの品目は次のように技術が伝播している。

- ①毛抜 一ノ木戸の栗山岩太郎が高崎で製造技術を会得し、1881（明治14）年開業する。
 - ②挽廻鋸 1882（明治15）年信州・諏訪地方の挽廻鋸を見本に創意工夫し基盤を築く。
 - ③のみ 1882（明治15）年、脇野町の「のみ」鍛冶河内庄次が三条に来往。製造技術が弟子に伝えられる。
 - ④鉋 1884（明治17）年、与板から来往した栗林信吉によって製造技術が伝えられる。
 - ⑤鉦^{ちやう} 明治23年頃与板から来往した坪井徳三によって技術が伝えられる²。
- これらは、三条が幅広く技術を習得した結果、多品目産地としての基盤を築くこととなった。

2-1-2 市場と組合

三条の市場は古くから形成され、鉄道交通のない徒歩の時代には半径五里余の商人や農民の出店で繁盛した。また、信濃川の水運を利用した物資の集散地を成し、早くから商業が発達し、販路は東北・関東方面にまでおよんでいた³。

1898（明治31）年に関東鉄物商組合が設立された。これは関東行の鉄物商人の組織であり、翌1899（明治32）年には規約が確定されている。組合の目的は第2条に「物産ノ改良ヲ謀リ粗製乱造ヲ防ギ販路ヲ拡張」することであった。そして第3条には「売価」の決め方、「偽名印」の禁止や「不正不実ノ得意先」に対しては組合員申し合わせて取引を絶つことなどが定められている。この時期の金物商、鍛冶職は、1899（明治32）年12月末では銅鉄打物金物商27名と鍛冶職95名が「三條町役場税課賦上納者調べ」に記載されている⁴。

2-1-3 戦争の影響と海外への進出

1894（明治27）年にはじまった日清戦争では、軍隊使用のナイフの生産が盛んになっている。さらに1904（明治37）年の日露戦争勃発に伴って、鋸、鉋、鋏、鉞、軍隊ナイフなどが軍需品として買い上げられ、需要が激増した。しかし1906（明治39）年に入ると一変して金物業界は不景気となった⁵。

この時期の三條金物卸商の海外活動をみると、藤川貞次郎は1909（明治42）年夏に樺太と取引を開始している。また、翌1910（明治43）年には高橋中儀（三代儀平）は、商品の見本品を携行し、東海道を下りながら、韓国仁川まで販路拡大を行っている⁶。

ここで『韓国行ノ日誌』から高橋中儀の動向をみてみよう。

1910（明治43）年6月24日三条駅を出発し、長野を経由し上野へ向かった。26日には粕壁の厚見商店で受注している。28日には相良（現牧ノ原）の小山商店で受注した。しかし、7月1日には大阪市内5～6軒訪問したが、不景気で注文はなく、見本を見せても反応がなかった。4日の岡山では本郷店訪問（夜再訪）、尾谷方訪問（晩再訪）しているが、両店とも取引開始に至っていない。5日、尾道では、恵川、井上、富永の3店訪問している。7日、太田の2店訪問、8日、岩国で小沢氏を訪問、また柳津では、難波、宮本の両店を訪問しているが、受注したかどうかの記述はない。

7月10日下関駅前から連絡用の蒸気船に乗り、沖合に待つ壱岐丸（1200トン）に乗船した。船内での税官吏の調査について次のように記述している。

見本品については、韓国入国時釜山で同等額の担保を預け、帰国時に変動ないことを示せば担保が返還されることとなった。午後10時壱岐丸は釜山に向け進行。（船中泊）

11日朝8時30分釜山に到着し、直ちに玉屋へ行き同店の案内により尾張や館に投宿した。

12日は大邱の商店を訪問。翌13日に、林商店訪問し受注している。14日は前日に続き佐藤店訪問したが、受注の記述はない。

15日は、原口金物店訪問し見本を見せている。16日、前日定期休業日であった釘本を訪問し、店内の陳列等見学している。17日は8時30分京城出発し、仁川の川端訪問。14時25分発で京城へ戻っている。18日に再び釘本訪問。19日、釘本氏に暇乞いをし、帰国の途についている。

7月20日10時50分発薩摩丸（2550トン）で釜山発20時30分下関到着。山陰、京都、奈良、伊勢、東京を經由し、8月1日20時49分三条に到着した。費用の合計は、146円57銭（1日当3円75銭）であった⁷。

国内では2店を除き、不況の影響でなかなか受注に至っていないこと、韓国では大邱の小林商店での受注はあったこと（他店は不明）が記録されている。若干21歳の若者が単独で韓国仁川まで取引のある商店を回りながら、商品の販路拡大を積極的に行っている姿勢が示されている。

京城で何度も訪問している釘本は、金物の釘本商店で釘本藤次郎が経営している。釘本藤次郎は佐賀県唐津の出身で、1895（明治28）年4月、凡そ20円の金物を携行し、京城で露天から出発した人物である。1897（明治30）年には唐綿製造販売を手がけ、業務を拡大している。1896（明治39）年11月には京城本町5丁目に、面積60余坪、楼上階下を通じて15室を有する本店を建設した。鎮南浦に支店を、仁川に通関出張所を、さらに京城南大門通には鉄工所を有する、大いに成功した人である⁸。

2-2 燕の金物業

三条と同様に和釘の主要産地であったが、和釘の需要が急減したため、鑢・矢立・銅器等へ転業した。また煙管生産の上昇にともなって、仕上げ担当の研磨工業・商品の付加価値を付ける鍍金工業が発展している⁹。

1907（明治40）年から銅器・鑢・煙管の生産の伸びが鈍化している。それぞれ次のような原因があげられている。

- ①「万年筆」の普及により矢立生産の減少・衰退
 - ②煙管は燕煙管合資会社の火災・会津若松の間屋山亀の煙管買い占めや「紙巻き煙草」の普及
 - ③銅器（厨房家庭用品）はアルミニウムや琺瑯の出現により減少
- 燕の金物産地も、新たな商品への転換が迫られていた。

2-3 新潟県の海外進出への取り組み

新潟県では産業界の海外進出を推進するため、海外実業視察実施にあたって次のように補助を行っている。

浦塩斯徳及ヒ樺太ノ情況ヲ視察シ以テ地勢上ノ便益ヲ有スル本県実業発展ノ方法ヲ企画セントシ明治四十年八月越佐汽船株式会社ニ対シ金貳千円ヲ補助シ視察船ヲ艤装セシメ県下ノ有力ナル実業家ヨリ視察員ヲ募リ露領沿岸及ヒ樺太ノ視察ヲ遂ケシメ

且ツ四十三年英京倫敦ニテ日英大博覧会開催ノ際ハ県補助ヲ与ヘテ視察員ヲ派遣シ¹⁰ 四十四年ニハ朝鮮視察ノ必要ヲ認メ染織業者ヲシテ彼地ニ渡航セシメ且ツ県補助ヲ与ヘ浦塩斯徳定期航海回数中特ニ一回ヲ割テ同地ヨリ北朝鮮沿岸ニ回航シ本県対浦港、清津、元山ノ所謂三角航路ノ関係ニ付キ大イニ調査セシムル等当業者ヲシテ努メテ海外貿易ノ発展ニ遅レサラシメンコトヲ期セリ¹¹

具体的な内容は、次のとおりである。

1907（明治40）年9月、ウラジオストクとコルサコフを視察している。この状況は『浦潮斯徳及樺太視察報告』が残されている。総勢74名の視察員で構成され、農業・漁業・醸造業・回漕業・雑貨商など第一次・第二次産業に従事する者が多数占めていた¹²。

視察員のなかから、県央地域の関係者は次のとおりである。石川佐伝治（農業）南蒲原郡長沢村、本間権八（空欄）西蒲原郡燕町、若林常也（染色業）三条町、吉原治平太（農業）南蒲原郡井栗村、笹川大作（織物業）燕町、広川伝蔵（唐糸木綿商）三条町の7名である。繊維関係者はいるが、金物業者は含まれていない。

1911（明治44）年、ウラジオストクと朝鮮北部に視察員が派遣されている。一員であった林静治が『日本海之対岸 浦鹽北線巡行視察記』を残している。視察員は22名で、県央地域では、斎藤純一郎（石油商）吉田町の名前が見える¹³。

新潟県は、日露戦争後にロシア極東、1911年の視察は朝鮮北部との貿易関係の形成を希求するものであった¹⁴。

3 大正時代

3-1 大戦勃発による異常な好況

1914（大正3）年、第一次世界大戦が勃発したが、三条は大戦初期の鉄の暴騰で深刻な不況に陥った。しかし、戦争が長期化すると交戦国では日用金物の生産が停止したため、1915（大正4）年以降、輸出向けナイフや南京錠の需要が激増した。鋸・ナイフ・包丁等刃物を中心に大戦とともに生産が急増し、大正6、8年生産額700万円前後となり大戦初期（大正4年）の3倍近い増加となった。金物工場では動力設備を拡大して対応したが、需要に応ずることができない状況であった。1918（大正7）年にはナイフ製造にあたる従業員は2000人を超え、1日13～14時間の長時間労働で対応した。

燕も同様に大戦初期は銅価格の暴騰で銅器関係者は大打撃をうけた。しかし戦争の進展にともないヨーロッパでは洋食器類が不足するようになった。1914（大正3）年には、スプーン、フォークの試作に成功した。研磨も朴の木の炭を使い手作業で行っていたものを、簡単な機械研磨に転換している。1914（大正4）年に輸出額5万円であったものが、1918（大正7）年には60万円に急増している。同年には、クロームメッキに成功するなど、洋食器生産の体制が整ってきている。

1914（大正3）年1月に岩崎又造商店は東京の黑板工業株式会社からロシアの軍用鉞^{まさかり}3万個を受注したが、三条はもちろん三島郡や長岡の業者にも交渉し製造に努めたが納品は3000個であった。残りの2万7000個は解約となった¹⁵。

満洲との取引は、1914（大正3）年に北貞商店が嚆矢で、1917（大正6）年には岩崎商店がこれに続いた¹⁶。

3-2 大戦後の不況

県金物業生産高の推移をみると1919（大正8）年670万円であったものが、1920（大正9）年には450万円に、さらに1921（大正10）年には400万円と激減している。

三条では、輸出用ナイフの注文見合わせが1920（大正9）年に20万ダースに達している。

一方、燕では洋食器の輸出額が、1918（大正7）年の60万円が、1919（大正8）年には30万円に、さらに1920（大正9）年には20万円と激減しているが、国内需要の増加により生産量は停滞ないし漸増の状況となっている。これは、近郊農村の余剰労働力を低賃金で雇用することにより、安価な製品で国内市場を拡大させた結果である。

3-3 新潟県の対策

輸出の伸び悩み続く中、その打開策として、1923（大正12）年3月、新潟県金属業者支部から新潟県嘱託として中国・満洲・朝鮮の市場調査を行うよう要請があった。三条町の相場良一郎、加藤文治郎、燕町の捧吉右衛門、遠藤松次郎の4名が、3月22日から4月30日までの日程で、上海、南京、漢口、北京、天津、青島、大連、奉天、平壤、京城などを視察している¹⁷。相場良一郎の「満鮮産業視察団日誌」¹⁸によれば、往路は長崎から上海へ、帰路は釜山から下関への航路を利用している。

門司から長崎への列車の中で、三条・燕と比べ、大陸との関係の近さを身を持って感じている。

3月24日

午後8時50分、下関に着し、連絡船にて門司に渡るステーション食堂にて夕餉を喫し、9時55分の列車にて長崎に向かう。車中、妙齡の女客あり、曰く上海に行くと。單身にしてしかも平然たり。われら一行4名為に顔色なし。一体この地方に至れば、上海に渡るも朝鮮にいくも、大連、青嶋に至るもほとんど一昼夜を出でず。平然として渡航するもまた宜^{むべ}なるかな。

我らが郷土の士、京参りをもって大旅行となすもの多し。蓋し昔にありては然らん。今はなお

これ謬見に座すものあるに至りては、あまりにこの眼界狭小あるを驚く。

3月27日に上海で、増野利助（西頸城郡の出身者で、岩崎第四銀行燕町支店長の親戚）から、上海地方の金物に就いて話を聞き、その後、日本総領事館を訪問し、副商務官加藤日吉から、中国人の生活状態、賃銭、工業の話を聞いている。日誌から引用する。

大体工業はいまだ幼稚にして家内工業大部分を占む。金物類の製造は全部家内工業に依り、上海付近にて鋏、錠前などの製造家約二百三十戸くらいありと。

銀製食器類は貯蓄の意味にてこれを使用する者多く、売水ごとき盛んにして上海にて銀食器製造家四、五十軒あり。これに要する原料銀は約二百萬元を一カ年に消費すと。由来支那人はまたは銅製品を好み、真鍮物は好まず。真鍮にて製したる物は全部ニッケル鍍金をなして使用す。古来より支那人は洗面器には銅を用い、洗面はもちろん沐浴、煮炊きもこれにてなすが故に頗る多く使用せられ、家庭の必需品なるが、近来瑤瑯鉄器の輸入漸々盛んなりという。(略)

金物屋は支那人以外の他国人が経営しては大概失負（敗）の経路を辿っている。よほど五金（支那語の金物屋）にてあるものは、経営上複雑した慣習や呼吸のあるものと見えて、上海またはこの付近で外人が開いた金物屋は皆目失負（敗）しているとのことである。宜なるかな。

(略)

増野氏が努めておられる当店にて貿易商なり。増野氏の通訳にて同店勤務の支那人にて金物に通ぜる者と対話す。

捧氏持参のスプーン、フォークの見本や加藤氏の博多鋏、田中製の肥後メス、田島製の錠などを見せたれど、引き合わざるものごとく、鋏のごときはよほど支那の方が安い由なりき。

大体手工業では労銀の関係上、到底日本は支那と競争ができず。仕事の程度は日本人の方がよほど進歩しているとはいえ、同じ手でやる仕事なら、この差は五十歩百歩の差であって、安価なる点に於いて彼に敵する能わず。支那大陸に向かって志を述べんとするものは、この点に留意せざるべからず。

(略)

日本人商業会議所を訪れ、会頭（県人なり）不在のため次席の木原大全氏に面会し、貿易上の話を聞く。由来、日本の商人はただ無闇に安価をのみモットーとするが故に、戦争の如き特別の時代のほかは日本品を使用せず。要するに時に取って間に合わせに使用するのみなり。

欧米品は然らず、価不廉なれども品質上品にて、また売り込みに際し、よく使用方法やら特点やらを教えて頗る懇切なるが故に、売り込みの際は高価なるが故に困難を感ずれども、いったん売り込みたるものは地盤を作るという。

印刷物などを頂戴せしかど、打ち刃物の如き殆ど貿易上では問題とならざる商品と見えて、参考となるもの一もなし¹⁹。

金物産地である杭召では、製鉄業や鍛冶屋のほか養蚕業の状況を見て、日本の生糸の行く末を案じ、むしろ日本人は、優秀な技術をもって、中国で、中国人を使いながら、生糸業、絹織物業を起すべきだ、と記している²⁰。

日誌の記述は詳細に及んでおり、労賃や商慣習の違い、品質に差がないなど中国への進出が容易ではないことが伺える。

この満鮮産業視察団に加わっている捧吉右衛門は1921（大正10）年に中国で洋食器を販売した。さらに1925（大正14）年には、輸出不振打開のため県が主催して、東シベリア・アジア方面への販路開拓に向かったが、輸出の振興にはつながらなかったようである²¹。

3-4 関東大震災と刃物類の活況

1923（大正12）年9月1日に発生した関東大震災は、復旧と関連して新潟県の大工道具等刃物類に大きな影響を及ぼした。東京を中心とする需要が増大したのである。

同年の三条金物問屋「高儀」の「営業調査報告書」には次のように記載されている。

拾月トナルヤ東京ノ商人ハ問屋ニ品薄トナル為製品ノ争奪戦トナル、拾月拾日頃ニハ白熱化シテ三割、四割、五割、六割等ノ値上げ致シ到底三条ノ製品ニテハ間ニ合ワザルタメ播州三木ヘ行き各問屋ノ製品ヲ買集メタル（中略）拾壹月中旬迄ノ間ハ実ニ每晚拾貳時迄荷造リスルノ状況ヲ呈セリ²²

3-5 商品開発への取り組み

金物の商品開発についても熱心に取り組んだことが伺われる。1925（大正14）年7月2日付けで、新潟県商品陳列所長長谷川剛之允は外務省通商局に「金物見本並型録蒐集」を申請している。新潟県産フォーク・スプーン類は、国内はもとより南洋インド地方まで輸出されていた。我が国唯一の産地であり、さらに将来とも有望な国産愛用品又は東洋市場輸出品として助長発展させようというものであった。またポケットナイフについては東洋市場に輸出するようになったが欧米品との競争となっており、将来輸出品として改善発達をはかる必要があったため、見本品を必要とした。具体的な内容は次のとおりである。見本品購入は、洋銀や銀又はニッケル鍍金等の①スプーン（テーブル用、デザート用、ティー用、コーヒー用、アイスクリーム用等）、②フォーク（テーブル用、デザート用、ケーキ用、オイスター用等）、③ナイフ（バター用、テーブル用、デザート用、フルーツ用等）、④その他関係食用器具類（角砂糖挟み、氷塊挟み等）で、アメリカ及びフランス製のもの。蒐集は米、英、仏、独国で洋食器類型録及び優良洋食器製造機械型録を。またポケットナイフ見本品購入は独、米、英国製の各種を。蒐集はポケットナイフ型録及びポケットナイフ製造機械型録を。というものであった。外務省では在ハンブルク、在ニューヨーク、在ロンドン、在フランスの大使館などに蒐集等を指示している²³。

これらを受けて、どのように対応したかは、具体的な事例等が見いだせなかったため、判然とし

ないが、新商品の開発に取り組む姿勢がうかがえる。

3-6 新潟県人の鮮満進出状況 1926（大正15）年

越佐新報社鮮満支局を発行所として刊行された、河田鶴三郎（1926）『新潟県人鮮満名鑑録』に掲載されている約1,000人から、商工業に携わっている者を抽出し職業別に分析した。分類にあたっては経済産業省の「産業分類区分」に拠った。なお、この名鑑録は河田鶴三郎が都邑在住の新潟県人を歴訪し収集したものを編集したとしている。したがって悉皆調査の結果ではないことから、自ずから限界があることに留意する必要がある。

最初に、新潟県の郡市別における進出者の人数をみると、最多は北蒲原郡で27人（朝鮮20、関東州5、満州2）である。次いで、南蒲原郡24人（朝鮮21、関東州3）、中頸城郡23人（朝鮮22、満州1）、中蒲原郡20人（朝鮮17、関東州3）、新潟市17人（朝鮮17）などの順で、総計237人である。

次に、産業分類別にみると、朝鮮の大分類では、「卸売・小売業」93人、「製造業」22人、「建設業」19人、「飲食店・宿泊業」16人などの順である。いずれの分類に該当するか不明の「実業」は22人である。関東州では、「卸売・小売業」12人、「建設業」5人、「実業」17人などとなっている。満州は、「建設業」1人、「実業」4人である。小分類を朝鮮でみると、「実業」22人のほか、「請負業」14人、「菓子商」8人、「呉服商」6人などが目立っている。多くの職種で進出していることがよみとれる。

進出地域別では、「京城」46人と最多であり、次いで「大連市」27人、「大邱府」21人、「釜山府」18人、「咸鏡南道」17人と都市に集中している状況が見られる。なお、この時期はまだ満州地方への進出は少ない状態である。

次に、県央地域の進出状況は表2のとおりである。

三条町からの進出者が多くを占めている。金物産業に関連しては、京城へ進出した大工道具商の小林萬録の名がみられる。

表2 新潟県央地域出身者の大陸進出状況

| 地域 | 府・道 | 出身地 | 職業 | 氏名 | |
|-----|------------|------|---------|---------|--------|
| 朝鮮 | 京城 | 南蒲原郡 | 三条一ノ木戸 | 実業 | 栗山清一郎 |
| | | | 大島村 | 酒商 | 関谷金一 |
| | | | 三条町 | 醸造業 | 兼古禮蔵 |
| | | | 三条町 | 雑貨商 | 齋藤榮松 |
| | | | 三条町 | 大工道具商 | 小林萬録 |
| | | | 加茂町 | 雑貨商 | 茂野松平 |
| | 京畿道 平壤府 | 西蒲原郡 | 三条町 | 洋雑貨商 | 川俣義三郎 |
| | | | 弥彦 | 請負業 | 藤原清蔵 |
| | 平安北道 | 南蒲原郡 | 三条町 | 商業 | 織田秀五郎 |
| | | | 三条町 | 旅館清州館 | 山崎清一郎 |
| | | | 三条町 | 旅館清州館 | 山崎すい |
| | | | 三条町 | 旅館清州館 | 中村きみ |
| | | | 三条町 | 旅館清州館 | 渡邊とし |
| | | | 三条町 | 綿花及雑貨 | 五十嵐音松 |
| | 忠清北道 | 南蒲原郡 | 三条町 | 雑貨商 | 小川彌平 |
| | | | 三条町 | 雑貨商 | 中野健蔵 |
| | | | 三条町 | 鮮魚商 | 齋藤禎治 |
| | | | 三条町 | 青物商 | 内山慶治 |
| | | | 三条町 | 博文堂書店 | 吉田市次郎 |
| | | | 三条町 | 呉服商 | 五十嵐萬次郎 |
| 釜山府 | 南蒲原郡 | 本成寺村 | 米穀商 | 土田徳次 | |
| | | 三条町 | 薪炭商 | 三本政蔵 | |
| | | 加茂町 | 実業 | 伊丹安太郎 | |
| | | 本成寺村 | 土木建築請負業 | 長谷川辰次郎 | |
| 関東州 | 安東県 | 南蒲原郡 | 三条町 | 薪炭商 | 三本政蔵 |
| | 大連市 | 南蒲原郡 | 加茂町 | 実業 | 伊丹安太郎 |
| | | | 本成寺村 | 土木建築請負業 | 長谷川辰次郎 |

出典：川田鶴三郎編輯（1926）『新潟県人鮮満名鑑録』から作成。

4 昭和時代（戦前期）

1927（昭和2）年3月に東京渡辺銀行・あかち貯蓄銀行の休業で金融恐慌が始まった。その後、鈴木商店の破綻、台湾銀行の全店舗休業など、多くの一流銀行・企業が倒産した。5月に入ってようやく一段落した。しかし、1929（昭和4）年10月24日（木）のニューヨーク株式市場の暴落を契機に恐慌が始り、全世界を巻き込む世界恐慌となっていく。恐慌は長期化し、1933（昭和8）年に

入ってようやく回復した²⁴。

次表は、新潟県の金属製品製造業に関わる1928(昭和3)年から1940(昭和15)年までの数値である。

減退していた新潟県の金属製品製造は、1934(昭和9)年に回復基調がみられ、翌35(昭和10)年に本格的に回復したといえよう。

表3 金属製品製造戸数・製造価額

| | 銅器・青銅器及び真鍮器 | | | 鉄製鍋釜鉄瓶類 | | | 刃物類 | | | 洋食器 | | | 農用機械器具 | | |
|-----------|-------------|-------|-----------|---------|-----|---------|-------|-------|-----------|------|-------|-----------|--------|-------|-----------|
| | 製造戸数 | 職工数 | 価額 | 製造戸数 | 職工数 | 価額 | 製造戸数 | 職工数 | 価額 | 製造戸数 | 職工数 | 価額 | 製造戸数 | 職工数 | 価額 |
| | 戸 | 人 | 円 | 戸 | 人 | 円 | 戸 | 人 | 円 | 戸 | 人 | 円 | 戸 | 人 | 円 |
| 1928 昭和 3 | 154 | 475 | 485,975 | 10 | 60 | 46,720 | 1,146 | 3,626 | 2,090,148 | 26 | 426 | 612,100 | 223 | 455 | 432,044 |
| 1929 昭和 4 | 128 | 368 | 434,930 | 6 | 28 | 30,420 | 1,198 | 3,641 | 1,934,025 | 30 | 362 | 720,150 | 238 | 491 | 412,389 |
| 1930 昭和 5 | 136 | 379 | 400,048 | 5 | 27 | 27,776 | 1,117 | 3,270 | 1,538,162 | 31 | 470 | 778,000 | 274 | 547 | 363,278 |
| 1931 昭和 6 | 136 | 401 | 373,072 | 7 | 31 | 24,505 | 1,072 | 3,232 | 1,377,625 | 43 | 425 | 792,550 | 294 | 587 | 366,175 |
| 1932 昭和 7 | 143 | 449 | 378,293 | 7 | 31 | 17,960 | 1,113 | 3,180 | 1,441,998 | 47 | 470 | 804,660 | 283 | 554 | 362,516 |
| 1933 昭和 8 | 140 | 448 | 380,075 | 4 | 64 | 14,418 | 1,394 | 3,397 | 2,068,158 | 50 | 594 | 890,180 | 327 | 662 | 493,386 |
| 1934 昭和 9 | 127 | 432 | 352,720 | 4 | 60 | 11,100 | 1,303 | 3,532 | 1,889,084 | 62 | 917 | 1,484,500 | 339 | 725 | 471,555 |
| 1935 昭和10 | 147 | 761 | 407,062 | 7 | 70 | 25,630 | 1,374 | 3,635 | 2,295,066 | 60 | 1,280 | 1,852,270 | 352 | 853 | 775,562 |
| 1936 昭和11 | 147 | 762 | 423,550 | 6 | 34 | 21,700 | 1,426 | 3,709 | 2,679,233 | 64 | 1,710 | 2,667,490 | 380 | 988 | 994,092 |
| 1937 昭和12 | 147 | 752 | 442,884 | 7 | 43 | 40,203 | 1,418 | 3,758 | 2,428,617 | 64 | 1,720 | 2,824,126 | 429 | 1,231 | 1,559,624 |
| 1938 昭和13 | 178 | 1,035 | 1,387,963 | 15 | 56 | 38,502 | 1,195 | 3,331 | 4,800,013 | 72 | 1,140 | 1,794,740 | 508 | 1,926 | 2,010,281 |
| 1939 昭和14 | 41 | 80 | 74,297 | 9 | 84 | 340,390 | 1,390 | 4,098 | 8,953,218 | 90 | 1,311 | 3,441,549 | 505 | 1,981 | 3,450,963 |
| 1940 昭和15 | 26 | 54 | 63,161 | 7 | 11 | 7,785 | 1,060 | 3,560 | 8,953,218 | 54 | 762 | 2,035,026 | 457 | 1,950 | 4,972,397 |

注：新潟県(1982)『新潟県史 資料編17近代五』pp429-430より作成。

4-1 上越線開通と日本海航路新潟北鮮線

恐慌の影響が残るなか、上越線開通と日本海航路新潟北鮮線開設は、新潟県にとって多いに期待を抱かせるものであった。1931(昭和6)年に上越線が開通し、県内の経済界では東京経済圏への直結を図った²⁵。

一方大陸へは、新潟と北部朝鮮(「北鮮」とを結ぶ航路が、1929(昭和4)年5月に不定期航路から定期航路へ、1931(昭和6)年1月には「新潟市命令新潟北鮮航路」となった。さらに1935(昭和10)年からは逓信省の補助金を受ける「日本海航路新潟北鮮線」となり、新潟県にとって大陸への進出機運を高めた。

4-2 三条町(市)の大陸進出への取り組み

三条町(市)の事務報告書から、行政の取組みや、金物業者の大陸への進出に関する記事をみてみよう。

4-2-1 金物同業組合と満洲団への金属製品供給

1933(昭和8)年1月24日に満洲国吉林省永豊鎮に所在する第一次試験自衛移民団長市川中佐(新潟県刈羽郡出身)から、移民団で使用する金属製品の購入について照会があった。満洲国第一次自衛移民団に金属製品(大工道具)を供給しないかという内容であった。金物同業組合長高橋儀平は、満洲国に販路を開拓する上で絶好の機会と捉え交渉を行った。その結果第1回納品価格金3811円45銭、第2回384円75銭、合計金額4196円20銭で納品を応諾した。組合員の努力により納品の結果、「優秀製品タルト低廉ナル価格奉仕」と購入者側の賞賛を得、「将来之等ノ場合ニオケル本町金属製品ノ購入ハ挙ゲテ本町ニ注文ヲスベク且又各方面ヘモ紹介」という申し出があったという。

しかしこの間、5月4日に、三条町役場の佐藤助役に対し、第二部業者(鍛工業)側から苦情が

持ち込まれている。その内容は、「この度の満洲行金物については吾々二部業者は何等の恩恵にもあづかっていない」「しかも第一部業者は自己の利の為に三条出来より粗悪なる他町村の生産物を三条製品として取り扱っている」「鋸は全部脇野町製品、鉋鑿は与板製品、斧は土佐出来を仕入れたと当業者間でいっている」「いづれも三条出来よりは悪い、これで三条の声価を落とす様な結果になりはしまいか」というものであった²⁶。

三条金物業組合では、8月5日に副組合長長沼直吉、高橋中儀、清水孝造の三氏を満洲に派遣し、販路の実情を視察させている。帰町後の報告に依れば、「三条町の製品が頗る適合し又良く販路も拡張されているが同業者間の競争が激しく実に銭厘を争っている状況に鑑み、金物輸出組合を創立し価格の協定をなす必要がある」としている。輸出組合創立に向けて熱意は高まっているが、組合内部では、第一部業者全員により組織するか、大商人のみ数名によって組織するか論争が続いた。このため、三条町勤業課では調停に乗り出すことにしている²⁷。

翌1934（昭和9）年に入ると、三条市金物同業組合では、市制発足とともに大発展を期し、また北鮮連絡航路により満洲との交通が緊密になることから事業を計画し、昭和9年度三条市予算編成にあたり1千円の寄付を申し出ている。

4-2-2 博覧会・見本市の取組み

1933（昭和8）年、町は金物、度器、染織物などの団体に働きかけ「満洲大博覧会」（7月21日から、於大連市）、「新潟県物産朝鮮見本市」（9月28日から、於朝鮮清津、咸興、雄基）に出展させている。町の物産紹介宣伝に効果があったとしている²⁸。

1934（昭和9）年には次のような活動が報告されている。

各種展覧会・見本市への出品では、「全国観光地みやげ品展覧即売会」（2月21日から、於台湾高雄市）、「新潟県輸出向金属製品見本展示会」（3月6日から、於大阪府立貿易館）、「新潟県物産大連宣伝即売会」（4月14日から、於大連市新潟県物産紹介所）、「輸出品見本市並求評座談会」（9月11日から、於横浜市）、「朝鮮見本市」（9月28日から、於朝鮮清津、咸興、雄基）、「京城宣伝即売会」（10月29日から、於朝鮮京城府）などに参加している。効果については、「市内営業団体タル金物、度器、染織物、足袋、紙凧、履物、食料品其ノ他有力者ヲ極力勸奨シ出品或ヒハ見本ニ直接参加セシムル等……本市物産ノ紹介宣伝上多大ノ効果ヲ挙げ得タルモノト確信スルモノナリ」とした²⁹。

1935（昭和10）年には次のような活動が報告されている。

各種展覧会・見本市への出品では、7月17日から新潟県主催の「大連奉天哈爾濱満洲見本市」が開催され、三条市からは出品するほか合名会社社長沼商店並びに相場合名会社が出席し渡満している。12月11日からは「対支対満輸出見本市」（於大阪府立貿易館）が開催され参加した³⁰。

1936（昭和11）年には次のような活動が報告されている。

見本市への出品では、10月15日から「朝鮮、岡山、宮城、新潟、徳島、岡山、三重連合輸出品見本展示会」が大阪市で開催され参加している。

アジア・太平洋戦争が勃発した翌年の1942（昭和17）年に、8、9月に満洲国新京で開催された

「満洲建国十周年博覧会」に出品参加した³¹。

4-2-3 講演会・座談会の取組み

1933（昭和8）年、産業に関する講演講習会では、7月11日に「満洲事情聴取並産業座談会」（講師：第一次試験自衛移民団長市川中佐）を開催した。町内の「金属工業当業者ノ聴講ヲ求メタルガ業者ノ裨益スルトコロ尠カラザリシモノアリタル」と認めている。7月25日の「北満ノ状勢並商取引ニ関スル講演会」（於県庁4階会議室、新潟県主催、講師ハ爾賓商品陳列所長川角忠雄）に三条町の佐藤助役、目黒勸業主任が出席した。翌26日には「県会議員鮮満視察座談会」（於新潟市伊太利軒、新潟県主催）が開催され栗山三条町長、高橋金物同業組合長、内山善吉が出席した。11月5日には「満洲市場紹介展覧会及講演会」（於新潟市伊太利軒、満洲国社団法人東亜産業協会及各市商工会議所共催）が開催され、三条町からは目黒勸業主任、高橋金物同業組合長や各担当者が出席した³²。

1934（昭和9）年、産業に関する講習会・座談会では、1月18日に「南洋ニ於ケル輸出貿易事情」研究座談会（於三条市図書館楼上、三条市主催・三条金物同業組合後援、講師新嘉坡日本商品陳列所主事吉田喜太郎）が開催され、多数の当業者が出席し効果があったとしている。7月17日には「日満経済懇談会」（於新潟市商工会議所、新潟県主催、講師東亜経済調査局主事田中九一・日満実業協会常任理事篠崎嘉郎）が開催された。三条市からは目黒勸業主任が出席した。懇談会では、日満連絡航路開始に伴い輸出入貿易の物資やその滞貨状況、将来の趨勢などが話された。三条市生産品の販路開拓に関して「頗ル参考裨益シタルトコロ尠カラザリキ」であったという³³。

1936（昭和11）年、産業に関する講演会・座談会では、7月17日に三条市物産陳列所楼上に於いて、「最近支那事情並産業視察座談会」が開催された。「南支北支事情並特ニ産業状態ノ視察」から帰国した稲村隆一を迎えて視察談を聞くとともに、座談が行われた。三条市生産品の販路開拓上の参考にしようと、金属生産品取扱業者が多数参加した。10月15日には、三条市及び南満洲鉄道株式会社共催で「満洲事情紹介活動写真利用講演会」が開催された。朝鮮・満洲事情や交通運輸の状況が映画とともに紹介された。「聴衆会場ニ横溢シ非常ナル盛会」であった³⁴。

1939（昭和14）年には次のような活動が報告されている。

産業に関する講演会・座談会では、8月25日に三条市と満洲国大使館の共催で「満洲事情講演並映画会」が第一小学校で開催されている³⁵。翌1940（昭和15）年には、1月15日に内山完造、稲村隆一を講師に、三条市役所で「支那事情講演会」を、3月26日に貿易組合中央会松井龍吉、山田広を講師に「輸出向製品求評並座談会」を三条市図書館で開催している。このほか南満洲鉄道株式会社（以下「満鉄」）新潟鮮満支案内所長山本澄江を講師に「大陸事情講演会並映画会」を開催した³⁶。

1941（昭和16）年には、9月19日に三条商工会議所で、満鉄新潟鮮満支案内所長千葉上を講師に「鮮満支経済事情懇談会」を開催した。また、2月20日、21日に「新潟県輸出取引振興求評懇談会」を大阪市、神戸市で開催した。市役所、会議所、関係業者計7名が出席した³⁷。

アジア・太平洋戦争が勃発した翌年の1942（昭和17）年に、8、9月に満洲国新京で開催された「満洲建国十周年博覧会」に出品参加した以降は大陸へ進出に関する記事は見当たらない。

4-2-4 企業の取組み

販路拡大のため満州に出張し取引を行い、さらに支店を開設するなど大陸へ進出した例を見てみよう。

外山栄助は、日支事変勃発で間もなく第一回の召集令状で応召、1年2ヶ月後に解除された。対満出張取引を行いたいという気持ちに駆られ、1月（1938年1月と思われる）に新潟港から朝鮮の清津を経由して、満州の各地を回っている。

図們では、旅館で聞いたO金物商社を訪問している。社長は大阪出身で、満州全土に販路を持つ卸問屋であった。受注したものは、両刃スリ込鋸3寸、4寸、5寸を各300ダース、6寸を200ダース、その他併せて約3千何百円であった。満州取引は一切荷為替付（代金引換）で貸し倒れの心配はなかった。利率は、大体満州では原価の倍で卸している噂で、外山は4割ないし5割掛けた値段で通したため、値段に関する交渉は何もなかったということである。この額は当時兵庫県三木へ出張して5日間で約3500円集金して上の成績と言われた時代である。

牡丹江では市内の中央にあるY金物小売店へ入っている。この店からは利器工匠具以外の家庭金物の注文を多額ではないが、かなり満足すべき商売を行っている³⁸。

この店は、後年、Y氏が富山に引き揚げることになり、外山は、店を商品ごと譲り受け、渡満の希望を持っていた弟に牡丹江支店として独立させた。

牡丹江では他に2店舗で取引を行っている。

佳木斯での取引は、三条では外山が最初である。満州取引のある他の4社ではまだ取引をしていなかった。牡丹江のY商店の知人で熊本県出身の竹下青年が、佳木斯金物小売店を開業していた。佳木斯で支店を開設する際には、この青年を頼り、同じ銀座通りに、買い取った店舗を煉瓦造りに改築し、「三条洋行」を開店している。

ハルビンでは一流の満州人商社を3軒回っている。満州人商社は取引に慎重である。K満州人商社の例をとると、第1回目は何処も同じで見本的の少々の注文だけであったが、2回目のときには警戒心は全くなく愛想よく迎え入れ快適な取引となった。3回目の出張時にはプロの写真屋を呼び従業員とともに記念写真に納まり、4回目のときは最高の親しみと丁寧な態度で、引き伸ばされた

表4 牡丹江市人口の推移

単位:人

| 区分 | 総数 | 満漢人 | 日本人 | 朝鮮人 | その他 |
|-----------|---------|--------|--------|--------|-----|
| 1936年12月末 | 38,881 | 23,730 | 7,332 | 7,760 | 59 |
| 1937年12月末 | 98,569 | 69,029 | 13,073 | 16,063 | 404 |
| 1939年12月末 | 108,000 | | 18,000 | | |
| 1940年 | 161,144 | | 39,106 | | |

出処: 1936年は高成鳳(1999)『植民地鉄道と民衆生活』法政大学出版局、p118。

1937年は満洲事情案内所編纂(1938)『満洲帝国概覧』p22。

1939年は南満洲鉄道株式会社(1940)『満洲読本』p359。

1940年は太平洋戦争研究会(1996)『図説満洲帝国』河出書房新社、p88。

表5 佳木斯市人口の推移

単位:人

| 区分 | 総数 | 満漢人 | 日本人 | 朝鮮人 | その他 |
|-----------|---------|--------|-------|-------|-----|
| 1937年12月末 | 50,017 | 45,845 | 3,024 | 1,072 | 76 |
| 1938年12月末 | 108,000 | 65,560 | 3,712 | 1,420 | 53 |
| 1940年 | 110,517 | | 9,347 | | |

出処: 1937年は満洲事情案内所編纂(1938)『満洲帝国概覧』p22。

1938年は(1940)『満洲地図帖』東京地形社、p13(地久社出版復刻版、1984)

1940年は太平洋戦争研究会(1996)『図説満洲帝国』河出書房新社、p89。

記念写真が飾られている応接間に通された。さらに夕刻には人力車が迎えに来て、酒食の招待を受けている。5回目は、主人が車を呼び、朋友(同業者)を紹介してくれている。徹底した厚意が示されたという³⁹。

外山栄助が、支店を開設した牡丹江市と佳木斯市の人口の推移は表4、5の通りである。いずれの市も発展途上であり、日本人の人口も大きく伸びている。外山栄助はこの発展状況を見ており、大陸進出の拠点とした。

4-3 加茂町の取組み

加茂町から満鮮視察団が派遣されるきっかけをつくったのは、新潟県議会議員で加茂町実業協会長田下正治であった。1934(昭和9)年の満洲・朝鮮視察後満鮮視察後、「行き詰れる本県の産業及び我が加茂町の物産の今後躍進すべき天地は満鮮の外にないのである、1日も早く同地の実情を調査し満鮮の実業家と経済的堅き握手をなし発展してもらいたい」という熱望をもったのである。1935(昭和10)年、加茂町の助成も得て、7月7日午前9時出帆の新京丸で清津に向かった。一行は、皆川正蔵が団長となり総勢19名であった⁴⁰。

1935(昭和10)年7月20日付け『新潟新聞』は、加茂町実業協会が派遣した満洲・朝鮮視察団の視察報告講演会の状況を次のように伝えている。

産業都市建設に加茂町民の奮起 物産は満鮮の新天地に躍進 盛況の視察講演会

(略) 視察報告講演会は実業協会主催の下に18日夜8時から小学校南舎に於いて開会した。打ち続く不況に叩かれた加茂の各物産が果たして満鮮に進出し得るや否や、俺らが代表は如何なる視察を遂げて帰町したかその報告を聞かんものと町民は定刻前から続々押し寄せ立錫の余地なき盛況、(中略) 実業協会長田下政治氏の開会の辞に次いで視察団長

▲皆川正蔵氏は「視察の大要」の題の下に大商業地たらんとする清津、将来の大軍港ともいべき羅津、雄基の三港につき視察の結果を述べ 満州国の凶門の状況から間島地方の現況と産業を説き更に延吉、会寧その他は加茂織物が向くかどうか 男物は不向きで婦人物の色織物と労働者向きのカナキン程度のもの、中流以上の家庭に入る純白な織物、マカロニー、白玉粉(加茂産が大阪から輸出している)、玩具煙火等は可能性あると信ずる故に進出の対策を講ずべきであると結び次ぎに、

▲森田清明氏「木工業に関して」と題し羅津には相当の営業者が多い、殊に新潟の大味屋支店、大阪屋百貨店等には加茂産の箆筒が驚くべき高価で陳列されているが気候関係で一寸いたんでいる、これは良材料を持って製作すればと思う。その他会寧に於ける越後屋家具店の状況から建具方面に言及し木工業者の奮起を促し

▲広瀬栄寛氏「新京方面」の題下に、(中略) 加茂織物、屏風、白玉粉、マカロニー、箆筒等挙げて新京を始め満洲国目指して躍進すべきであると激励し、

小島康平氏は「吉林方面」と題し、人絹織物も有望であるが、さらに紋織物、染織物を改良し輸出してはどうか、丸川昌平は「紙工品に就いて」と題し、オンドルを冬季間使用するのでその敷き紙や日本趣味を好むので屏風等は頗る有望と信ずるなどと報告した⁴¹。

当時、加茂町は「多彩工業の加茂町」と紹介され、生産工業は多種多彩に亘り対外的に名声を馳せているものに、織物、木工品、白玉粉、マカロニー、押麦、酒等があるとしている。昭和10年中の輸出向織物は人絹織物35,122疋、514,395円、特殊織物、ネーム、レース136,000円と織物総生産高5,151,092円の12.6%を占めている。その他の生産高は箆笥60,000本（750,000円）、建具110,900間（199,620円）、白玉粉300,000貫（360,000円）、マカロニー528,000磅（105,600円）、押麦64,800石（700,000円）などであり、マカロニーは加茂マカロニー製造所、永井、石附の3社、白玉粉はヤマセ、押麦は丸英が生産していた。木工品は、東京、京都、大阪、九州のほか朝鮮満洲にまで輸移出されていた⁴²。

加茂町の主要な生産者から構成した視察団を派遣し、大陸進出への町民の期待と熱意をうかがうことができる。

4-4 金物産地の衰退

1938（昭和13）年から翌1939（昭和14）年にかけて、鉄鋼配給統制、非軍需品の銅製品135点製造禁止、屑鉄統制の実施、金物製造資材の切符制実施、鋼材、コークス、油も配給制となるなど統制が進展する。金物業界の非常事態といえる状況となった。

戦時下の金物産地では、軍需優先となり平和部門の製造は衰退していく。

5 まとめ

新潟県産業界の大陸進出状況については、数値を示す資料は現時点では見つけることができなかった。3-6で示した1926年の『新潟県人鮮満名鑑録』と同様な資料を数値化して比較することができれば、進出状況を示すことができたと考える。しかしながら筆者の管見では、朝鮮、満洲、関東州各地の商（工）業会議所会員名簿に出身地あるいは本籍まで記載しているものをみた記憶はない。新潟県の県人会は、東亜旅行社満洲支部（1942）『満支旅行案内』によれば、満洲の奉天、営口、鉄嶺、公主嶺、新京、佳木斯、延吉、齋齋哈爾、朝鮮の清津、中国の大同、徐州、開封、南京、漢口に結成されており、これらの名簿が入手できれば、課題を解明することが可能になるものと思われる。

これまでみてきたように、新潟県をはじめ三条町（市）や加茂実業協会などのように積極的に大陸進出の推進策を講じたり、また戸山栄助のように満洲に支店を開設したように、三条・燕の金属産業関係者はあらゆる機会を捉えて、大陸への進出に取り組んだといえよう。

註

- ¹ 長岡商工会議所（1935年11月）『長岡商工会議所月報 第98号』長岡商工会議所、pp3-4より。
- ² 新潟県（1987）『新潟県史通史編6 近代一』新潟県、pp791-794より。
- ³ 三条市史編集委員会編（1983）『三条市史 下巻』三条市、pp277-278より。
- ⁴ 三條金物卸商組合創立二十周年記念誌編集委員会編（1980）『金物と草鞋と -三條金物卸商のあゆみ-』三條金物卸商組合、pp92-96より。
- ⁵ 同上、pp96-97より。
- ⁶ 同上、p97より。
- ⁷ 高橋中儀（1910）「明治四拾参年式拾壱才ノ時ノ韓國行ノ日誌 附旅費明細」復刻1978年、五代高橋一夫。
- ⁸ 高橋刀川（1908）『在韓成功之人物』虎與號書店、pp160-165より。
- ⁹ 燕市編（1993）『燕市史 通史編』燕市、pp548-549より。
- ¹⁰ 新潟県(1911)『新潟県の産業』新潟県、p63より。
- ¹¹ 新潟県(1913)『新潟県の産業』新潟県、p79より。
- ¹² 麓慎一（2013）「日露戦後における新潟と対岸地域：自由港制の廃止から日韓併合へ」新潟大学コアステーション人文社会・教育科学系付置環東アジア研究センター編『環東アジア研究センター年報 8巻』、p65より。
- ¹³ 同上、pp75-76より。
- ¹⁴ 同上、pp80-81より。
- ¹⁵ 前掲『金物と草鞋と -三條金物卸商のあゆみ-』 p121より。
- ¹⁶ 同上、p121より。
- ¹⁷ 同上、pp135-136より。
- ¹⁸ 相場商事株式会社（2014）『満鮮産業視察団日誌 相場商事株式会社の歩み』
- ¹⁹ 同上、pp28-32より。
- ²⁰ 同上、pp36-37より。
- ²¹ 燕市編（1993）『燕市史 通史編』燕市、p594より。
- ²² 新潟県（1988）『新潟県史通史編8 近代三』新潟県、pp235-238より。
- ²³ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B10074436500、商品見本関係雑件 第三巻（B-3-3-6-38_003）（外務省外交史料館）
- ²⁴ 矢部洋三外編著（2008）『現代日本経済史年表 1868-2006年』日本経済評論社、pp27-29より。
- ²⁵ 新潟県編（2000）『新潟県史 概説 新潟県のあゆみ』新潟県、p466より。
- ²⁶ 『北越公論』昭和8年5月7日付け
- ²⁷ 同上、昭和8年8月28日付け
- ²⁸ 「三条町事務報告書 昭和八年」三条市史編集委員会（1981）『三条市史 資料編第七巻近現代三』新潟県三条市、pp727-729より。
- ²⁹ 「三条市事務報告書 昭和九年」三条市史編集委員会（1981）『三条市史 資料編第七巻近現代三』新潟県三条市、pp732-734より。
- ³⁰ 「三条市事務報告書 昭和十年」三条市史編集委員会（1981）『三条市史 資料編第七巻近現代三』新潟県三条市、p740より。
- ³¹ 「三条市事務報告書 昭和十七年」三条市史編集委員会（1981）『三条市史 資料編第七巻近現代三』新潟県三条市、p783より。
- ³² 「三条町事務報告書 昭和八年」三条市史編集委員会（1981）『三条市史 資料編第七巻近現代三』新潟県三条市、pp727-729より。
- ³³ 「三条市事務報告書 昭和九年」三条市史編集委員会（1981）『三条市史 資料編第七巻近現代三』新潟県三条市、pp732-734より。
- ³⁴ 「三条市事務報告書 昭和十一年」三条市史編集委員会（1981）『三条市史 資料編第七巻近現代三』新潟県三条市、pp749-752より。
- ³⁵ 「三条市事務報告書 昭和十六年」三条市史編集委員会（1981）『三条市史 資料編第七巻近現代三』新潟県三条市、p770より。
- ³⁶ 「三条市事務報告書 昭和十四年」三条市史編集委員会（1981）『三条市史 資料編第七巻近現代三』新潟県三条市同上、pp773-774より。
- ³⁷ 同上、pp777-778より。
- ³⁸ 『三條金物ニュース 第153号』（三條金物卸商組合、1978年3月15日）

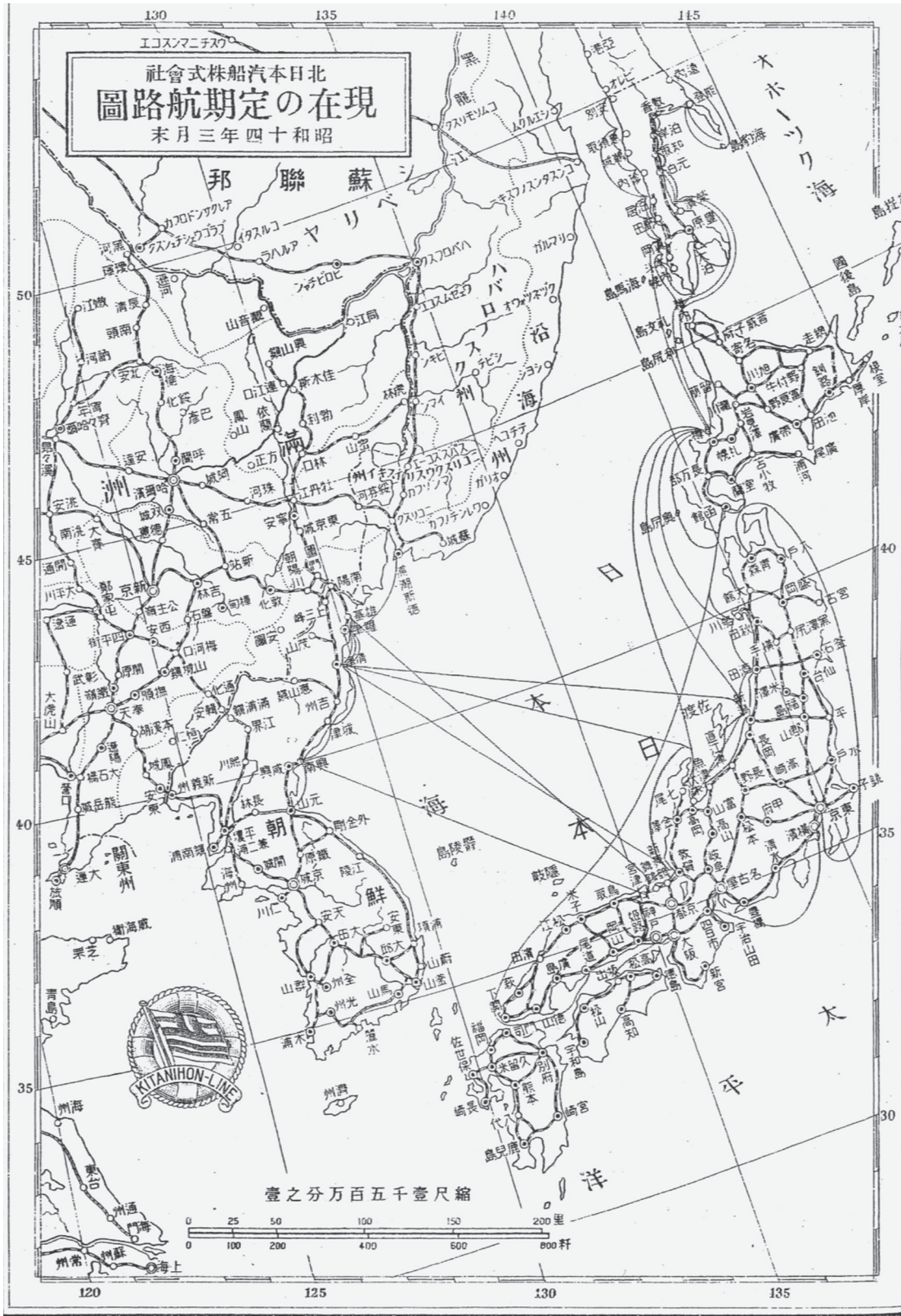
³⁹ 『三條金物ニュース 第154号』（三條金物卸商組合、1978年4月15日）

⁴⁰ 『新潟新聞』（昭和10年7月7日付け）

⁴¹ 『北越公論』（昭和10年7月19日付け）

⁴² 斎藤義雄（1937）『黎明の新潟』鴨聲社、pp330-331より。

附図 北日本汽船定期航路図（1939年3月末）



出処：北日本汽船株式会社編（1939）『北日本汽船株式会社二十五年史』挿入図